

【宗祖法然上人御法語】

(第九)安心あんじん

1

念仏の行者ぎょうじゃの存ぞん候そうろうべき様ようは、後世ごせを恐れ往生を願ねがひて念仏すれば、終わる時必ず来迎らいこうせさせ給たまうよしを存ぞんじて、念仏申まをすより外ほかのこと候そうらわず。

念仏の行者ぎょうじゃの承知じやうちしておくべきことは、死後しごどうなるかを案あんじて極樂往生を願ねがひて念仏すれば、臨終りんじゆうの際には必ず阿彌陀様のお迎えを頂たまげることことを心得こころえてお念仏を称ほめえるといふことことのほかにはないのです。

2

三心さんじんと申まをし候そうろうも、ふさねて申まをす時は、ただ一つの願ねがひ心こころにて候そうろうなり。

三心さんじんと言いひましても、ひとことことで言いうならば、ただ往生を願ねがひ心こころです。

3

その願ねがひ心こころの偽いつはりらず、飾かざらぬ方をば、至誠しじやうしん心こころと申まをし候そうろう。

その願ねがひ心こころの、正直しじやうしんで飾かざることがない様ようを至誠しじやうしん心こころと呼よびます。

4

この心のまことにて、念仏すれば臨終らいしゆうに來迎らいごうすということことを、一念も疑わぬ方を、深心じんしんとは申し候そうろう。

そのようなまことの心でお念仏したならば、臨終には必ず仏様のお迎えがあると思じて、決して疑わぬ様じんしんを深心じんしんと呼びます。

5

この上、わが身も彼の土へ生まれんと欲おもい、行業ぎようごうをも往生のためと向くるを、廻向えこう心しんとは申し候そうろうなり。

その上で自分自身が極樂浄土へ往生したいと思ひ、全ての善根ぜんこんを往生のために振り向ける様えこうしんを廻向心えこうしんと呼ぶのです。

6

この故に、願う心偽らずして、げに往生せんと思そうらい候えば、自ずから三心さんじんは具足することそうろにて候うなり。

こういうわけで、極樂往生を願う心にて嘘偽りなく、心から往生したいと思さんじんうのであれば、三心さんじんは自然に備わってくるのです。